

中流域の橋上遺跡、向原遺跡のみであり、縦長剥片生産技術を有したこれらの地域の生産遺跡から供給されたと考える。したがって縦長剥片の生産は一元的であった可能性が高いが、それらが素材となる器種がこれらの地域でほぼ共通することは、このような縦長のスクレイパーを必要とした生業形態の共通性を示唆すると考えられる（阿部朝衛；1986）。

3. 大梁川遺跡を指標とする石器群の分布圏

大梁川遺跡を指標とする石鏃組成の分布圏と縦長剥片を素材とした特定器種の分布範囲とはほぼ一致する。したがって山形県・宮城県（北部を除く）を中心とし、不明瞭だが福島県北部・秋田県南部に及ぶ範囲を大梁川遺跡を指標とする石器群の分布とする。これらの地域の生業形態の類似性を示すものと考えられる。特に両側刃加工のスクレイパー・エンドスクレイパーが松島湾沿岸部・三陸沿岸部の貝塚地帯に顕著ではなく、これらの器種をもつ大梁川遺跡を指標とする石器群は内陸に適応した生業形態をもつ集団による石器群であると考えられる。縦長剥片の供給から見るかぎり、これらの地域は最上川水系の珪質頁岩の石材供給圏であり、生業形態が類似する地域間で石材の流通関係が成立している点は注目される。

註 記

註1：寒河江市向原遺跡（寒河江高校社会部；1969）から大木10式土器とともに出土した縦長剥片とその石核は、寒河江考古第3号（安彦・東海林；1972）では旧石器時代の遺物としている。しかし、東北大学考古学研究室助手会田容弘氏から、現在では大木10型式期の遺物として認識されているとの御教示を賜った。

7. 中期後葉から後期前葉の剥片石器素材の供給関係

剥片石器の主な素材である珪質頁岩、珪化凝灰岩はグリーンタフ地域の各所に見られ、産地を特定することは困難であり、それらに近接する地域では小規模な石材供給関係が複数成立していたと考えられる。グリーンタフが広範囲に渡って分布しない地域としては馬淵川水系・三陸沿岸部・北上川水系・白石川一名取川水系・福島県沿岸部・阿武隈川水系・阿賀野川水系があり、これらの地域では石器素材の供給を他領域に依存しなければならなかつたと考えられる。また、これらの地域と良質な石材が産出する地帯との間に比較的大規模な石材供給関係が成立した可能性がある。特徴的な縦長剥片の分布圏から最上川中流域を生産地とする山形県・秋田県南部・宮城県・福島県北部を中心とする珪質頁岩の石材（剥片）流通圏が不明瞭ながら判明してきた。その他の地域の様相は限られた資料から推測するしかないが、剥片剥離の特徴や石核が極めて多い遺跡などから生産・消費の関係を類推し、各水系ごとにまとめる。

（1）馬淵川水系

九戸郡軽米町君成田IV遺跡F49住居跡（後期前葉）（遠藤勝博他；1983）・丹後谷地遺跡第56号住居跡（後期前葉以前）（八戸市教育委員会；1986）の住居跡床面の剥片貯蔵ピットから両極

剥離で剥離された剥片が出土している。丹後谷地遺跡の原石は径2～4 cmの珪質頁岩の小円礫である。基部加工があり撥形を呈する小形のエンドスクレイパーと石鏃とがこれらの剥片が素材となった石器として指摘されている。

馬淵川水系では後期前葉の様相しかわからないが、小円礫を両極剥離で剥離し、小剥片で特定の石器を製作するシステムが成立している。この原因は大形の石材の利用可能度が低く、小転礫から石器を製作する必要性から成立したと考えられる。大形の石材は搬入であろうが、供給地は不明である。

(2) 三陸沿岸部—北上川水系

石材（剥片）生産地 石核が比較的多く残されている遺跡が零石川流域にある。盛岡市繫V遺跡（盛岡市教育委員会；1984）では中期後葉を主体とする包含層から大形の石核が多く出土している。零石町広瀬II遺跡（松野恒夫；1980）では中期後葉（大木10式期）を主体とする遺物包含層から、54点の大形粗製刃器（自然面を打面とし、1作業面を持つ石核）が出土している。このような石核は盛岡市繫IV遺跡（上野・工藤；1980b）、上野遺跡（工藤利幸；1980）、南ノ又遺跡（上野・工藤；1980a）などの零石川流域の中期後葉の遺跡から出土している。

中期後葉の時期に零石川流域の遺跡で石核が顕著に増加することは確実である。このような剥片生産がどの程度の規模を有するのかはわからないが、自己の領域を越えて周辺地域に供給された可能性がある。零石川水系で生産された剥片は技術的な特徴が明確ではないので、縦長剥片のようにその供給圏を明確には出来ない。また、奥羽山系から注ぐ各支流にもこのような石材（剥片）生産の集落が複数成立した可能性がある。

また、三陸沿岸部の頁岩の石材採集遺跡である大船渡市碁石遺跡（芹沢長介他；1974）などの時期・供給圏などは不明である。

北上川水系中・下流域・三陸沿岸部・鳴瀬川水系・松島湾沿岸部 これら地域の中期後葉の遺跡には縦長剥片が顕著ではないので、最上川流域以外の供給源が考えられる。おそらく北上川水系の奥羽山系の石材（剥片）または大船渡市碁石遺跡などの頁岩などの供給を受けていた可能性がある。気仙沼市田柄貝塚では珪質頁岩、珪化凝灰岩の産地を奥羽山系のグリーンタフ地帯と同定している（蟹沢；1986）。また石核が少ないとから、剥片の形で石材が搬入された可能性を指摘している（笠原・茂木；1986）。

(3) 白石川—名取川水系

前述のように最上川水系中流域の縦長剥片の分布圏であり、珪質頁岩の供給を最上川水系中流域に依存した地域である。

(4) 福島県沿岸部—阿武隈川水系—阿賀野川水系

阿武隈川水系・阿賀野川水系で石材の供給地帯は不明である。福島県沿岸部の北部および阿

武隈川水系の下流部は南部と比較して珪質頁岩が多く、縦長の剥片も見られる。そのような遺跡としては、相馬郡飯館村上ノ台A遺跡(鈴鹿良一他; 1984)、相馬郡飯館村日向南遺跡(鈴鹿良一他; 1986)、二本松市田地ヶ岡遺跡(梅宮・八巻他; 1975)がある。福島県においては北部では最上川水系の石材の供給を受けた可能性がある。大沼郡会津高田町十五塙遺跡(石本弘他; 1983)などの阿賀野川流域では石質は瑪瑙質など様々で、石材が豊富な印象は受けない。阿武隈川水系・阿賀野川水系では明確な生産-消費関係は成立しなかった可能性が高い。

まとめ 不明瞭ではあるが、中期後葉に零石川水系域と最上川水系中流域とに自己の領域を越えて、他の領域に剥片を供給する剥片生産の拠点的集落群が成立した可能性が高くなった。前者については北上川水系・三陸沿岸部を中心とする供給圏が想定され、後者が東北地方中部を供給圏とすることは縦長剥片の分布からほぼ確実である。このような生産地域はさらに存在する可能性があるが、報告書から把握するのは困難である。中期後葉(大木10型式期)にこのような生産地域が顕著になる理由は明確ではない。しかし白石川水系の大梁川遺跡に見られるように、良質の石材を産出する他領域に石材供給を依存する割合を前時期に比べて強めた領域の増加が背景にあることは確実であろう。中期後葉の東北地方では、このような現象はある程度普遍性を持ち、最上川水系中流域の縦長剥片生産技術はこのような状況に対応して効率的な剥片供給を行う過程で発生(または再生)したと推定される。